

日本ギヤスケル協会

第31回 例会

2019年6月1日(土) 関西学院大学 大阪梅田キャンパス 1005 教室
〒530-0013 大阪市北区茶屋町 19-19 アプローズタワー10階
(13:30より受付開始)

14:00 開会の辞 日本ギヤスケル協会会長 木村 晶子 (早稲田大学教授)

14:05~15:35 研究発表 司会: 松本 三枝子 (愛知県立大学名誉教授)

Cranford における性の受容

発表者: 谷 綾子 (龍谷大学講師)

成功の場、墮落の場、救済の場——George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」

発表者: 濱 奈々恵 (福岡大学外国語講師)

15:45~16:45 講演

司会: 鈴木 美津子 (東北大学名誉教授)

Cousin Phillis 再考——「祈り」に着目して

講演者: 足立 万寿子 (元ノートルダム清心女子大学教授)

16:50 閉会の辞

日本ギヤスケル協会副会長 松岡 光治 (名古屋大学教授)

懇親会

日時: 6月1日(土) 17:30~19:30

会場: AMARANTI (アマランティ)

大阪市北区梅田3丁目1-3 ルクア2F (JR大阪駅直結) TEL: 06-6151-1234

参加費: 3,000円

※上記全プログラム、会員外の方の参加も歓迎いたします。

問合先: 〒501-6295 岐阜県羽島市江吉良町3047-1 岐阜県立看護大学 木村正子研究室

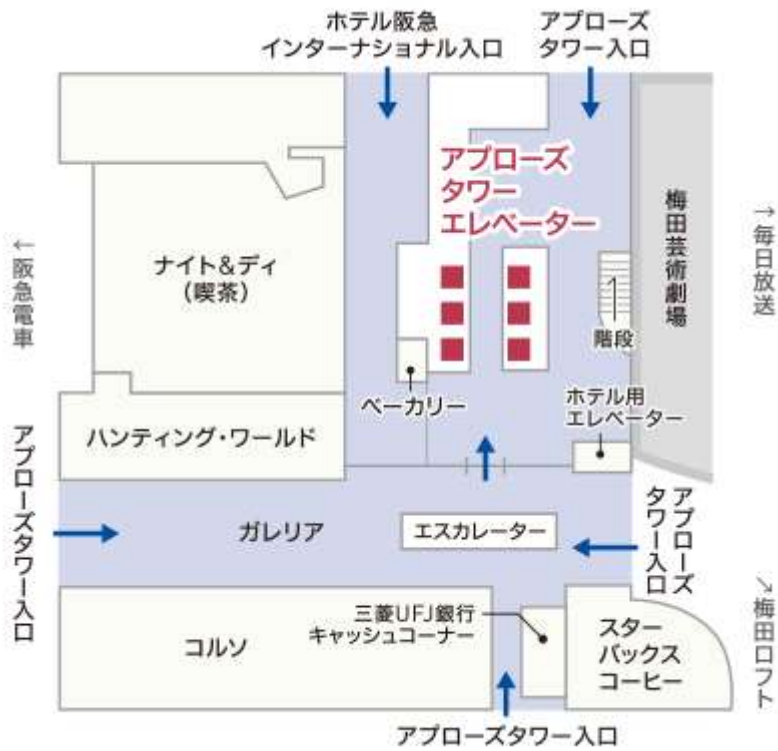
日本ギヤスケル協会事務局: mkimura@gifu-cn.ac.jp

HP: <http://www.gaskell.jp/>

本例会は関西学院大学の後援を受けています



アプローズタワー (ホテル阪急インターナショナル) 1階フロア図



懇親会の会場



梗概

研究発表

Cranford における性の受容

発表者：谷 綾子（龍谷大学講師）

Cranford は女の軍勢に占領されているという有名な一節から物語は始まるが、*Cranford* は決して女だけの町ではない。実際には、社交界の一員とは認められない労働者階級の男達が大勢いるのである。彼らは上品を愛する女性たちの意識に上らないにすぎない。しかし、無意識下に追いやったはずの異性の存在は、**Brown** 大尉や **Signor Brunoni**、そして **Peter** の姿を借りて意識の上に回帰し、女性たちを脅かすと同時に活気を与える役割を果たしている。

フロイトは、私たちが普段気づいている「意識」はほんの一部にすぎず、心の大半は、普段は意識することのない「無意識」が占めているとする。無意識の中には、思い出したくない感情や観念があり、それらは意識に上らないよう「抑圧」されている。精神分析療法は無意識に抑圧された感情を意識化することで、自我を再構築することにある。*Cranford* において「意識」に上らないよう「抑圧」されているのは男性の存在である。本発表では、フロイトの理論に基づき、*Cranford* の女性たち、とりわけ **Deborah** と **Miss Matty** が超自我である父の呪縛を乗り越え、タブー視してきた性を受容する過程について考察する。

成功の場、墮落の場、救済の場——George Eliot 作品との比較でみる「外の世界」

発表者：濱 奈々恵（福岡大学外国語講師）

George Eliot は Elizabeth Gaskell の作品の中でも特に *Cranford* (1853) を気に入り、折に触れてこの作品を読み返している。しかし Eliot は青年が「外の世界」で成功し、彼の帰国と共に平和が訪れるという安易な結末に納得がいかなかったようで、“**Brother Jacob**” (1864) と *Felix Holt, the Radical* (1866) で *Cranford* の書き直しを試みている。確かに *Cranford* では「外の世界」が成功の場として表象されているが、Gaskell 作品の多くでは「外の世界」と不幸な女性の接点が目立ち、しかもその不幸の原因と（性的）墮落が切り離せない関係にある。実生活で Gaskell は「墮ちた女（16歳の少女）」を救済の目的で国外に移住させたが、Gaskell が描いた「墮ちた女」は誰一人として国外に移住していない。本発表では *Mary Barton* (1848)、“**Lizzie Leigh**” (1850)、*Ruth* (1853) を中心にして、「外の世界」の特異性を物理的、心理的な側面から考察し、「墮ちた女」の運命や国外移住を解決策としなかった Gaskell の姿勢を読み取っていく。

講演

Cousin Phillis 再考——「祈り」に着目して

講演者：足立 万寿子（元ノートルダム清心女子大学教授）

エリザベス・ギヤスケル（1810-65）の中編小説 *Cousin Phillis*（1863-64）の中のホールマン師の「祈り」は3つの祈り（①牧師としての公的祈り、②牧師かつ一個人としての半公的・半私的祈り、③一個人としての私的祈り）に分けられる。

彼は、牧師としての聖書、ラテン語等の語学、さらに農学や工学の知識も豊かで、それを活かして牧畜や畑仕事も人一倍巧みだと自負していた。それを示すのは②の「祈り」である。ところが、彼の、娘フィリスへの理不尽な咎めが彼女を死に瀕する脳炎へと追いやる。ここで彼は、誰に見せるのでも語るのでもなく、真剣に己の言動を振り返り、神にも問いかけ、自身の弱さや自惚れの過ちに気づく。これを示すのは③の「祈り」である。この「祈り」を生活の中で「口に出さない」で実践するのはフィリスの回復を願うホールマン家の使用人、ベティやティモシーであり、それを示すのが「光」に象徴される彼等の行動である。

ところで、私の住む岡山を故里に持つ作家、坪田譲治（1890-1982）の作品には、この象徴的「光」を感じさせるものがある。それにも触れてみたい。